

研究ノート

多様な施設で行う小児看護学実習の学びの特徴

水野 芳子*・西村 あをい**・村上 洋一***

前田 はる香*・山浦 那津子*

要旨：少子化，看護師教育課程の増加，医療的ケア児の増加等により，小児看護学実習の施設を病院以外の教育・福祉施設を含めた多様な施設で行っている。この実習の学びの特徴を明らかにし，効果的な実習方法を検討することを目的に，内容分析とテキストマイニングにより，小児看護学実習終了後の学びを記述したレポートを分析した。結果として，内容分析により【家族支援の重要性】【発達段階に応じた小児看護の理解】【多職種連携の理解】【コミュニケーションの理解】【観察の重要性】【重症心身障害児の理解】【小児看護師の役割】【子どもの権利を守る】の8つのカテゴリーが得られた。また，テキストマイニングでは実習病棟により学びに違いはあったが，病棟以外の施設実習により学びのばらつきは少なくなっていた。考察として，多様な施設での小児看護学実習でも小児看護の目標は学ぶことができている，特に，家族支援の重要性，多職種連携，小児看護師の役割を学んでいた。

キーワード：小児看護学実習，施設，内容分析，テキストマイニング

Characteristics of Pediatric Nursing Practice Learning in Diverse Facilities

Yoshiko MIZUNO*, Awoi NISHIMURA**, Yoichi MURAKAMI***

Haruka MAEDA* and Natsuko YAMAURA*

Abstract: Due to lower birthrates, the increase of nursing schools, and the increase in the number of children receiving medical care, pediatric nursing practice is being conducted at a variety of facilities other than hospitals, including educational and welfare facilities. To clarify the characteristics of what nursing students learn during their practical training and examine effective methods of practical training, we analyzed reports describing what students learned after the completion of their pediatric nursing training through content analysis and text mining. The following eight categories were obtained through content analysis: "Importance of family support," "Understanding of pediatric nursing according to developmental stages," "Understanding of interprofessional team collaboration," "Understanding of communication," "Importance of observation," "Understanding of children with severe mental and physical disabilities," "Role of pediatric nurses," and "Protecting children's rights." In addition, text mining showed that there were differences in learning depending on the practice ward, but there was less variation in learning in facility practice outside of wards. Nursing students were able to learn the goals of pediatric nursing even in pediatric nursing practice in diverse facilities; in particular, they learned the importance of family support, interprofessional team collaboration, and the role of pediatric nurses.

Keywords: Pediatric nursing practice, Facilities, Content analysis, Text mining

* 東京情報大学 看護学部
Faculty of Nursing, Tokyo University of Information Sciences

** 湘南鎌倉医療大学 看護学部
Faculty of Nursing, Shonan Kamakura University of Medical Sciences

*** 東京情報大学 総合情報学部
Faculty of Informatics, Tokyo University of Information Sciences

2021年10月18日受付
2021年12月20日受理

I. 背景

総務省の報告によると、日本の15歳未満人口は1980年より減少が続いており、2020年にはおよそ1,512万人となった（総務省統計局、2020）。また、15歳未満の1日あたり推計入院患者数は2014年で28,100人であり、1984～2014年の30年間で4割に減少した（内山・田中、2018、p. 26）。一方、日本看護協会によると、看護師養成教育課程の入学者数は2011年から2018年まで年々増加し（2020、p. 77）、附属病院が無い看護大学及び専門学校では、小児看護学実習施設の確保が困難となり、学生が実習で経験できる内容にばらつきが生じている（厚生労働省、2019、p. 4）。加えて、医療の進歩に伴い、医療的ケアを受けながら地域で過ごす小児は、2020年に0～19歳で推計20,155人と増加している（厚生労働省、2020）。更に医療系の学会では、在宅療養児の成長発達を促し、家族の生活を支援して在宅療養が継続できる為の、退院調整、外来、重症心身障害児（者）通所施設、特別支援学校、訪問看護などの役割の重要性が報告されている。

2017年に新設された本看護学部のカリキュラムの大きな特徴は、1年次から地域で暮らす人々・健康・環境と看護の関係を学ぶという点にある。そして、3年次に配置された応用実習としての小児看護学実習においても、地域で生活する様々な健康レベルの子どもと家族の特徴と小児看護の理解を目的とし、実習施設として教育・福祉施設を含めた5種類の施設が計画された。

宮谷・大見・宮城は小児看護学実習施設と実習平均日数について、小児（科）病棟実習は平均6.9日、成人・小児の混合病棟7.0日、保育園・幼稚園等2.6日、障害児施設3.1日、小児（科）外来1.2日、その他（小中学校、NICU、学童保育等）1.8日と、小児看護学実習の場は拡大していると報告しており（2013、p. 69）、秋田・高橋・弓気田・山口は文献検討により、小児病棟にこだわらず障害児施設や外来で子どもを受け持つ実習が実施可能であると報告している（2019、p. 113）。しかし、教育・福祉施設における実習の成果は論じられていない（山内他、2017、p. 89）との報告もある。保育所実習については1979年から（阿南、1979、p. 133）、幼稚園実習については2000年から（関森・阪口、2000、p. 160）

報告があり、小児看護学実習における意義や効果について数多く報告されている。そして近年では保育所実習においても、地域で生活する健康障害をもつ子どもと家族への支援についての教育が行われている（杉村・藤塚・佐藤・殿岡・廣瀬、2018、p. 60）。

実習フィールド（施設）の構成については、4種類のフィールドによる実習の報告は3件あったが5種類以上はなく、保育所と特別支援学校のフィールド構成については報告が無かった（山内他、2017、p. 85）。そこで今回、5種類という多様な施設での小児看護学実習の学びの特徴を明らかにすることで、社会の変化と医療の現状にあった、新しく且つ効果的な実習方法の提案ができると考えた。

II. 目的

本研究の目的は、多様な施設で行う小児看護学実習の学びの特徴を明らかにし、効果的な実習方法を検討することである。

III. A大学看護学部小児看護学実習の概要

実習時期：3年生

実習施設及び期間：保育所又は幼稚園2日間、特別支援学校1日間、重症心身障害児（者）通所施設1日間、小児科外来1日間、重症心身障害児（者）病棟または新生児集中治療室及び新生児回復室（NICU/GCU）3日間。

実習方法：保育所または幼稚園、特別支援学校、重症心身障害児（者）通所施設については事前に相談の上、臨地実習指導者の指導のもと活動に参加し、対象の理解と看護の役割を学ぶ実習を行い、小児科外来及び重症心身障害児（者）病棟又はNICU/GCU実習は、教員が臨地実習指導者と連携し受け持ち患児について看護過程の展開を学ぶ実習を行った。重症心身障害児（者）病棟には特別支援学校が隣接しており、学生の受け持ち患児は学童以上であった為、実習中に訪問学級及び特別支援学校での授業の見学を経験した。

実習内容と指導体制：保育所又は幼稚園実習は、保育士・幼稚園教諭の指導の下、保育活動に参加した。特別支援学校実習では、指導教諭の調整により医療的ケアが必要な児童生徒の学級を中心に、担任教諭の指導の下で学級活動に参加した。一部学生は医療的ケアのない児童生徒の学級での実習

だった。学校看護師に同行し看護師の役割を学んだ学生もあった。重症心身障害児（者）療育施設実習では、看護師だけでなく、理学療法士、作業療法士、生活指導員、介護士らの指導により療育活動に参加し実習した。

実習記録：実習毎に、事前学習及び実習記録を様式に沿って記録した。そして、全ての実習終了後、1週間以内に「小児看護学実習で学んだこと」をテーマとして800字以内の小児看護学実習終了後レポートの提出を課題とした。今回この終了後レポートを分析対象とした。

IV. 方 法

1. 対象

A大学看護学部3年生が作成した小児看護学実習終了後レポート（テーマ「小児看護学実習で学んだこと」）91名分。

2. 研究方法

研究承諾が得られた対象者のレポートについて、実習施設別に内容分析とテキストマイニングにより分析した。

3. 分析方法

(1) 内容分析

Berelsonの内容分析の手法を用いて分析した。具体的には、対象となる各レポートの文章を研究者間で精読し、その内容を簡潔に示すコードを作成した。1つの文章に複数の内容が含まれる場合には複数のコードを作成した。次に、作成したコードを意味内容の類似性に基づき分類し、内容を忠実に反映するサブカテゴリー、カテゴリーを作成した。分析の過程は質的研究及び小児看護の経験がある共同研究者間で繰り返し検討し、信頼性妥当性の確保に努めた。

(2) テキストマイニング

病棟実習施設の違いにより重症心身障害児（者）病棟及びNICU/GCUの2群に分類し、記述内容を形態素解析の後、頻出語を抽出した。そして、文中に出現する共起語のJaccard係数を計算、係数が0.1以上の共起語から共起ネットワーク図を作成した。分析ソフトはPythonプログラムのJanomeとScikit-learnライブラリを使用した。これらの結果を共同研究者間で検討した。

4. 倫理的配慮

対象者へは、研究の目的、方法、参加及び途中撤

回の自由、プライバシーの保護、匿名性の確保、データの管理、結果の公表、参加を断っても不利益は生じないことを文書と口頭で説明し、同意書の提出により同意を確認した。研究参加の説明は、小児看護学実習評価が全て終了した4年次卒業前の時期に行った。

本研究は、東京情報大学の人を対象とする研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号2019-014）。

V. 結 果

1. 小児看護学実習を通じた学生の学び

分析の結果、539のコード、35のサブカテゴリー、8のカテゴリーを得た（表1）。以下、コードを《 》で、サブカテゴリーを〈 〉で、カテゴリーを【 】で示す。それぞれのカテゴリーに含まれたコード数は、【家族支援の重要性】146（27.1%）【発達段階に応じた小児看護の理解】79（14.7%）【多職種連携の理解】64（11.9%）【コミュニケーションの理解】46（8.5%）【観察の重要性】65（12.0%）【重症心身障害児の理解】71（13.2%）【小児看護師の役割】33（6.1%）【子どもの権利を守る】35（6.5%）であった。

【家族支援の重要性】に含まれるサブカテゴリーは〈家族の不安や悩みの傾聴〉〈家族との情報共有〉〈家族を含めたケア〉〈家族との信頼関係が重要〉〈家族も看護の対象〉〈家族への教育・指導〉で、〈家族との情報共有〉には《地域で生活する児をサポートするには（家族と）十分な情報提供・情報交換が必要〉〈家族への教育・指導〉は《見だけではなく、母親や父親へのケアも同時に行い、退院後の不安がないように・・教えていた》などのコードにより得られた。【発達段階に応じた小児看護の理解】のサブカテゴリーは〈発達段階に応じた関わり〉〈成長発達理解の重要性〉〈成長発達と個人差の理解〉〈母子の愛着形成の支援〉〈成長発達促進への関わり〉であった。〈発達段階に応じた関わり〉は《小児外来では幅広い小児の年代を対象とし、発達段階に応じて処置前後のプレパレーションを実施し、理解を促すことが看護師の重要な役割》《（保育所実習では）成長発達に応じての子どもの接し方について違うということに気づいた》などのコードから得られた。【多職種連携の理解】のサブカテゴリーは〈多職種連携の重要性〉〈医療と教育の連携〉〈職種間の情報共有〉〈多職種連携の方法〉〈家族との連携〉で

表1 内容分析によるカテゴリー・サブカテゴリーとコード数

カテゴリーとコード数	サブカテゴリー
家族支援の重要性 146 (27.1%)	家族の不安や悩みの傾聴
	家族との情報共有
	家族を含めたケア
	家族との信頼関係が重要
	家族も看護の対象 家族への教育・指導
発達段階に応じた 小児看護の理解 79 (14.7%)	発達段階に応じた関わり
	成長発達理解の重要性
	成長発達と個人差の理解
	母子の愛着形成の支援 成長発達促進へのかかわり
多職種連携の理解 64 (11.9%)	多職種連携の重要性
	医療と教育の連携
	職種間の情報共有
	多職種連携の方法 家族との連携
コミュニケーション の理解 46 (8.5%)	対象に応じたコミュニケーションの方法
	子どもの意思の尊重と理解
	非言語的コミュニケーションの大切さ 小児との信頼関係
観察の重要性 65 (12.0%)	観察の重要性
	ストレスサインを読み取る
	アセスメントして対応する重要性
重症心身障害児の 理解 71 (13.2%)	重症心身障害児へのかかわり方
	小さな反応への気づき
	在宅生活への取り組み
	療養環境の重要性
	教育の重要性 成長発達を促す大切さ
小児看護師の役割 33 (6.1%)	安全確保
	小児の不安軽減
	家族の治療理解を促す
子どもの権利を 守る 35 (6.5%)	子どもの権利条約への気づき
	子どもの権利を守る重要性
	子どもの権利を守る看護実践

あり、〈多職種連携の重要性〉は〈病院実習では多職種連携の大切さを知ることができた〉、〈医療と教育の連携〉は《病院の医師や看護師との連携が特別支援学校の先生や看護師にもある》、〈多職種連携の

方法〉は《重症心身障害児施設では、看護師、保育士、理学療法士、栄養士、薬剤師、バスの運転士などが連携していて・・・工夫をしていた》などのコードから得られた。【コミュニケーションの理解】は〈対象に応じたコミュニケーションの方法〉〈子どもの意志の尊重と理解〉〈非言語的コミュニケーションの大切さ〉〈小児との信頼関係〉であった。〈対象に応じたコミュニケーション〉は《小児科外来では様々な子どもが病院を訪れ、その子に合わせた話し方、対応を行っていた》《話せなくても目や手などを使って教えてくれているのをすごく感じた》などのコードから得られた。【観察の重要性】のサブカテゴリーは〈観察の重要性〉〈ストレスサインを読み取る〉〈アセスメントして対応する重要性〉であり、〈観察の重要性〉は《日々の患者の観察が重心病棟の患者の看護をしていく上で一番大事》《児の訴えを読み取り判断する観察力が必要》などのコードにより得られた。【重症心身障害児の理解】のサブカテゴリーは〈重症心身障害児への関わりかた〉〈小さな反応への気づき〉〈在宅生活への取り組み〉〈療養環境の重要性〉〈教育の重要性〉〈成長発達を促す大切さ〉であった。【小児看護師の役割】には〈安全確保〉〈小児の不安軽減〉〈家族の治療理解を促す〉があり、〈安全の確保〉には《子どもが安全に学校で過ごせるために、看護師がいて、医療的ケアを子どもに行っていること》《予防接種の際には、子どもが不安にならないようお母さんと一緒に行い、お母さんには子どもの安全面を説明しながらどのような体勢で押さえたら良いかなど、しっかり説明を行っていた》などのコードにより得られた。【子どもの権利を守る】は、〈子どもの権利条約への気づき〉〈子どもの権利を守る重要性〉〈子どもの権利を守る看護実践〉のサブカテゴリーがあった。〈子どもの権利条約への気づき〉は《どの施設においても子どもの権利を尊重する関わり方を工夫して行っていた》《プレパレーションを行うことで子どもも処置に対する気持ち準備をすることに繋げること、意思決定を促すことも子どもの権利を守る上で大切なこと》などのコードから得た。〈子どもの権利を守る重要性〉は《障害を持っていても教育を受ける権利などの子どもの権利はみな平等にある》《痛みの緩和や子どもの権利を守るといった配慮がとても大切》などのコードから得られた。

2. 重症心身障害児（者）病棟とNICU/GCU病棟での学びの違い

レポートの記述内容を形態素解析し、抽出された上位頻出語5位までを重症心身障害児（者）病棟実習群とNICU/GCU実習群の2群で比較した（表2）。重症心身障害児（者）病棟実習群は30名、NICU/GCU実習群61名であった。両群に共通した頻出語は、「看護師」「子ども」「大切」「家族」「実習」「成長発達」「小児看護学実習」であり、重症心身障害児（者）病棟実習群のみの頻出語は「特別支援学校」「重症心身障害」「重要」、NICU/GCU実習群のみの頻出語は「必要」「ケア」であった。2群及び全体の上位頻出語10位までをそれぞれグラフに示した（図1、2、3）。

また、共起ネットワーク図についても2群に分けて作成し、それぞれの図において、抽出された用語間の関連性の強い要素を点線で囲んだ（図4、5）。重症心身障害児（者）病棟実習群では、「変化-気付く」「権利-尊重」「特別支援学校-教員」「コミュニケーション-取る」の関連が強かった。また、「看護師-教員-特別支援学校」に関連して、子どもと成長発達や大切なことを学んでいたと示されていた。一方、NICU/GCU実習群では、「信頼関係-気付く」「職業-連携」「特別支援学校-障害者養育施設」の関連が強かった。また、「子ども-家族-看護」に大切、必要なこと、尊重すること、新生児のサインや表情を読み取ることを学んだと示されていた。

表2 小児看護学実習後レポート上位5位までの頻出語

全 体		重症心身障害児（者） 病棟実習群		NICU.GCU実習群	
1	子ども	1	看護師	1	子ども
2	家族	2	子ども		家族
	看護師	3	大切	2	看護師
3	小児看護学実習		小児看護学実習	3	成長発達
4	成長発達	4	特別支援学校		小児看護学実習
5	大切	5	重症心身障害	必要	
	必要		家族	4	実習
			重要	ケア	
			実習	5	大切
			成長発達		

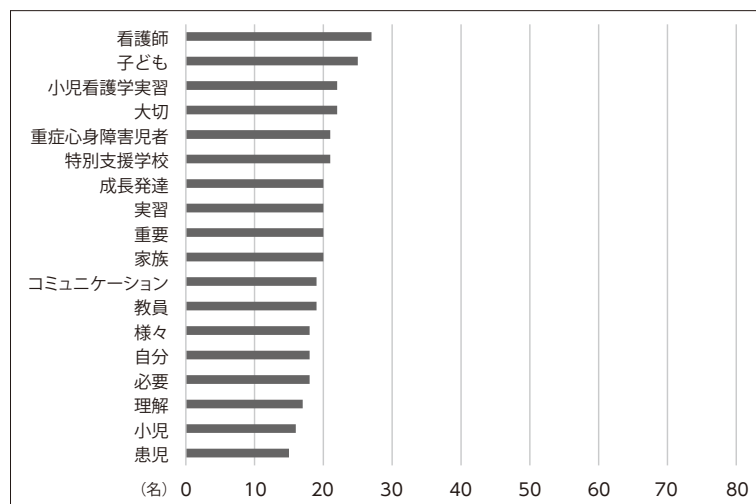


図1 頻出語上位10位まで (重症心身障害児（者）病棟実習群) N=30

81.9%であったこと、本研究の実習に関わった患児は、保育所・幼稚園実習以外は重症心身障害児と低出生体重児であったことによると考えられる。

すなわち、病棟は重症心身障害児（者）病棟又はNICU/GCU病棟で実施した多様な施設で実習においても、小児看護の目標は達成できていたと言える。更に、家族や教育職を含めた多職種連携の重要性や情報共有、連携の方法についても学ぶことができていた。

3. 重症心身障害児（者）病棟実習群とNICU/GCU実習群の学びの違い

松本・高岡は、重症心身障害児病棟又は施設での実習は、コミュニケーションの方法などの重症心身障害児への看護や特徴の理解だけでなく、生活環境の調整、生命の尊厳や権利、家族への支援、看護観の深まり、多職種連携を学んでいると報告している(2017, p.9)。本研究の共起ネットワーク図においても、コミュニケーションをとることや変化に気付くこと、権利を尊重することを学んでいることがわかった。一方、NICU/GCUでの実習はディベロップメンタルケアとして、環境調整やポジショニング、スキンケアなどケアの実際（玉村・小西・井上・田甫, 2016, p.31）や育児、愛着形成を促し退院に向けた家族への関わりを学んでおり、頻出語の上位の「家族」や共起ネットワーク図において「子ども」「家族」を中心に「成長発達」や「支援」について「する」「学ぶ」「考える」など関連によって示されていた。

このように、実習の対象となる小児の状況と病棟の特徴により学びの内容は異なっていた。

4. 複数実習施設を組み合わせる効果と特徴

宮良・元山・高田の報告では、病院における小児看護学実習の学びの中で、「家族に対する援助」の内容は、入院に付き添う母親の負担に関してであった(2018, p.63)。病棟と外来での小児看護学実習の学びをテキストマイニングで分析した工藤・草薙の報告では、「家族」は病棟実習1日目と外来実習4日目のみ出現していた(2020, p.120)。しかし、多様な施設における実習での学びにおいて「家族」は全体で2位の出現頻度であり、共起ネットワーク図においても子どもと家族の関連が示されており、家族を看護の対象として信頼関係を気づき、支援する重要性を学んでいたと考えられる。これは、NICU/

GCU実習による家族への支援だけでなく、家族が共にいる小児科外来と、家族との連携が重要である通所施設での実習において、指導者の実践から学んでいると推察される。このような、家族支援の重要性についての学びが多いことは地域での施設を含んだ多様な施設での実習の大きな特徴と言える。

また、小児看護学実習の学びとして「多職種連携」を報告している文献はなく、家族や教育職を含めた多職種連携の重要性や情報共有、連携の方法についての学びも、多様な施設での小児看護学実習の特徴と考えられる。共起ネットワーク図において、NICU/GCU実習群では「職業-連携」の関連が示されており、地域の重症心身障害児施設や特別支援学校、重症心身障害児（者）病棟では、看護師、保育士、理学療法士、栄養士、薬剤師、バスの運転士などが連携している療養環境から、小児と家族、医療、福祉、教育における多職種連携の実際を学び、そのあり方を考える機会になっていたと考えられた。

そして、これらの施設における看護の役割をそれぞれの実習で繰り返し考えることで、「小児看護師の役割」として学びを言語化したと考えられる。病院以外の実習では、臨地指導者が保育士、幼稚園教諭教員、通所施設管理者、理学療法士及びそれぞれの施設の看護師だった。改めて小児看護学実習の学びとして、小児看護師の役割をカテゴリーに挙げた報告は見当たらない。他職種の実習指導を受け、各施設で勤務する数少ない看護師の役割を繰り返し考えた結果、学びとして表現されたと推察される。

前項で述べたように、実習する病棟により学びの内容は違いがあるが、上位頻出語では「子ども」「家族」「看護師」「成長発達」という小児看護に重要な単語は2群のどちらにも含まれていた。重症心身障害児（者）病棟実習では、4日間という短期間の実習期間の間に家族の面会場面に同席する機会は少なく、家族への支援の実践は難しい。これは、重症心身障害児（者）病棟やNICU/GCUのみでなく、重症心身障害児（者）通所施設や特別支援学校実習を組み合わせたことにより得られた効果だと考えられる。また、複数の施設を組み合わせるにより、学生の実習施設による経験の差を減らす効果が期待できる。しかし、小児病棟以外の施設での実習それぞれの学びは報告されているが、「重症心身障害児（者）病棟またはNICU/GCU」「小児科外来」「保育

所・幼稚園」「重症心身障害児（者）通所施設」「特別支援学校」の5つの施設を組み合わせる効果については、今後更に検討する必要がある。

5. 実習指導体制と方法及び課題

本研究の実習を開始するにあたり、特別支援学校、保育所及び幼稚園の各施設は、小児看護学実習を実施した経験がなく、指導者が看護職ではなかった為、実習目的や方法について事前の十分な意見交換と説明を必要とした。また、重症心身障害児（者）及び通所施設実習では、学生が重症児と関わる経験が少ないことから怖さを感じることもあるため、実習前の講義や演習から、学生がイメージ化できるよう工夫する必要があると言われている（藤堂，2019，p.207）。本研究では、実習前の重症心身障害児のイメージ化や4日間という短期間で受け持ち患児の看護過程の展開を学ぶ教育方法、特別支援学校実習方法などの工夫についてはデータとしていない。また、学生が1日から4日間という短い期間で施設が変わる方法について、環境に慣れるまでに時間がかかる学生にとっては慣れたところに次の施設に移ることになり（山内・川名・筒井，2017，p.89）、学生の負担が心配されているが、このような負担軽減の工夫についても今回は検討していない。

このような、教育効果を高める他職種を含めた指導体制と実習前後の教育方法の工夫についても併せて検討することで、より効果的な実習方法の提案が期待できると考えられた。

VII. 結 論

教育施設を含んだ多様な施設での小児看護学実習の学びについて、以下の結論を得た。

1. 病院以外の地域の教育・福祉施設を含んだ多様な施設での小児看護学実習は、病院での実習と同様に小児看護の目標を学ぶことができていた。
2. その中でも特に、家族支援の重要性と多職種連携、小児看護師の役割を学んでいた。
3. 実習施設のうち、重症心身障害児（者）病棟とNICU/GCUでの実習に学びの違いはあったが、多様な施設での実習により学生の実習施設による経験の差が減る効果が期待できる。

今後、このような実習形態における教育方法の工夫について検討することにより、実習の効果が検証されることが考えられる。

【文献】

- 秋田由美，高橋泉，弓気田美香，山口明子（2019）. 小児病棟以外での小児看護学実習に関する文献研究. 駒沢女子大学研究紀要, 2, 105-114.
- 阿南和代（1979）. 小児看護学実習に於ける保育所実習の意義, 全国自治体病院協議会雑誌, 147, 133-137.
- 厚生労働省（2015）. 母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について（平成27年9月1日医政看発0910第4号）<https://www.mhlw.go.jp/content/000642612.pdf>（参照2021年11月19日）
- 厚生労働省（2019）. 看護基礎教育検討会報告書（令和元年10月15日）<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>（参照2021年12月9日）
- 厚生労働省（2019）. 看護師等養成所の運営に関する指導ガイドラインの一部改正に係る新旧対照表.（令和2年10月30日医政発1030第1号）<https://www.zenhokan.or.jp/wp-content/uploads/tuuti915-3.pdf>（参照2021年10月15日）
- 厚生労働省（2020）. 医療的ケア児等の支援に係る施策の動向.（令和2年1月15日第17回医療計画の見直し等に関する検討会）<https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000584473.pdf>（参照2021年12月10日）
- 荃津智子編著（2012）. 発達段階を考えたアセスメントにもとづく小児看護過程, 医歯薬出版株式会社.
- 工藤悦子，草薙美穂（2020）. 小児看護学実習における病棟または外来の実習環境の違いによる学びの実態, 日本医療大学紀要, 6, 117-127.
- 松本智津，富岡美佳（2017）. 重症心身障がい児病棟における小児看護学実習での学習効果, 山陽論叢, 24, 7-15.
- 宮良淳子，元山彩織，高田理衣（2018）. 病院における小児看護学実習での学生の学びと指導のあり方, 中京学院大学看護学部, 8(1), 59-68.
- 宮谷恵，大見サキエ，宮城島恭子（2013）. 教員からみた学士課程における小児看護学実習の現状, 日本小児看護学会誌, 22(2), 68-74.
- 日本看護協会（2020）. 学校養成所数及び定員, 令和2年看護関係統計資料集, <https://www.nurse.or.jp/home/statistics/pdf/toukei11.pdf>（参照2021年10月15日）
- 関森みゆき，阪口しげ子（2000）. 小児看護学実習：健康児の理解・評価 保育園・幼稚園実習の「まとめ」での学生の気づきから, 日本小児看護学会誌, 9(1), 160-161.
- 関根小乃枝（2019）. 看護師等に求められる能力とカリキュラム改正の意図, 医療, 75(2), 135-139.
- 総務省統計局（2020）. 統計トピックス（人口推計）（令和2年5月）<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/topics/topi1251.html>（参照2021年10月15日）
- 杉村篤士，藤塚真希，佐藤朝美，殿岡美絵子，廣瀬幸美

(2018). 保育園実習における看護学生の学び—健康障害をもつ子どもの支援—, 横浜看護学会誌, 11(1), 55-61.

玉村尚子, 小西美樹, 井上ひとみ, 田甫久美子 (2016). NICU実習を通じた看護学生の学び—ディベロプメンタルケアと児に出会って感じたこと・考えたこと, 独協医科大学看護学部紀要, 10, 23-32.

藤堂美由紀 (2019). 小児看護学実習を行う看護学生が重症心身障害児の特性を理解するための指導看護師のかかわり, 日本小児看護学会誌, 28, 200-207.

内山有子, 田中哲郎 (2018). 日本における小児患者数の推移と疾病構造の変化, 厚生の指標, 65(1), 25-30.

山内朋子, 川名るり, 筒井真優美, 江本リナ, 太田智子, 吉田玲子 (2017). 看護系大学小児看護学実習フィールドの現状と今後の研究課題に関する文献検討, 日本小児看護学会誌, 26, 84-90.